

フォローアップ(計画・実績)報告書

調査名		エコミュージアムを活用した持続可能な地域創出のための調査	
調査主体	幹事府省(庁)局課名	環境省中部地方環境事務所	
	関係府省(庁)局課名等	農林水産省東海農政局	
調査地域		長野県、岐阜県、愛知県及び三重県の伊勢湾・三河湾流域。	
調査年度		平成21年度	
配分額		35,698千円	
調査概要	調査内容	<p>平成22年10月に生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が開催される中部圏において、エコミュージアム構想の検討を通じ多様な主体のネットワークを構築し、広域圏の新たな持続可能な地域創出モデルを構築し、全国、世界に発信しようとするものである。</p> <p>自然環境を大きく2つ類型(海、森・里)に分け、それぞれを対象として、エコミュージアム構想の策定を通じ多様な主体のネットワークを構築する。調査は、海エリア、森・里エリア別に①現状分析、②多様な主体の参加の下、③活動プログラムの実証実験を実施するとともに、田園地域における、生物多様性と農村コミュニティの関係について事例調査等を行う。</p> <p>また、COP10が開催されることを契機に、COP10の場で世界に発信するため、中部圏全体で主な活動団体が集まるエコミュージアム協議会を結成し、今後の取組に向けた宣言文を採択するとともに、調査成果を発信するシンポジウムを開催する。</p>	
	調査結果(成果)	<p>エコミュージアム構想の策定を通じて、エコミュージアムを活用した持続可能な地域創出のモデル構築するとともに、生物多様性の持続可能な利用に係るコーディネーター・インタープリター等の人材が育成された。これにより、人口減少社会において持続可能な地域創出の全国展開が可能となった。</p> <p>また、エコミュージアム協議会の結成により、ボトムアップ(多様な地域主体の参画)を活かし広域連携事業を推進する仕組みを構築することができ、新たな視点からの広域連携事業の構築手法として全国で活用が可能となった。</p> <p>さらに、生物多様性保全活動を通じた農村コミュニティの活性化や地域の特性に応じた生物多様性保全活動による効果的なコミュニティ形成へのあり方を提案できた。</p>	
		調査結果の活用状況	調査結果を受けた具体化
計画	期待される効果等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生物多様性の持続可能な利用に係るコーディネーター・インタープリター等の人材の活躍。</li> <li>・持続可能な地域創出を推進するための地域指定等の検討。</li> <li>・COP10を契機とした生物多様性保全施策の展開(COP10で決議された事項の実施を含む)。</li> <li>・地域コミュニケーションと生物多様性保全活動との関わりについて多様な協働体組織や参加者へ意向調査を実施。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・森の健康診断・海の健康診断等の活動の拡大。</li> <li>・流域保全・再生の視点からの保護地域の指定や事業の実施。</li> <li>・地域コミュニティにおける生物多様性保全活動のあり方提案について啓発普及の拡大。</li> </ul>
	22年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・H21年度の調査結果を活用しつつ、新たに長良川・揖斐川上流部で伊勢・三河湾流域の保全・再生調査を実施。実態把握を行い、各主体との保全活動の連携のあり方を検討。</li> <li>・上記調査実施に際しては、H21年度調査で形成されたNPOなどとのネットワークを活用。</li> <li>・COP10の場における、保全活動などの発信に係る検討に活用。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・COP10や関連行事において、伊勢三河湾流域の保全活動の取組を世界や国内に向けて情報発信。</li> <li>・伊勢三河湾のNPO等が一同に会す、生物多様性流域対話を実施。情報交換と今後の活動のあり方を検討。</li> </ul>
フォローアップ	23年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・H21年度及びH22年度の調査結果を活用しつつ、引き続き長良川・揖斐川上流部で伊勢・三河湾流域の保全・再生調査を実施。実態把握を行い、各主体との保全活動の連携のあり方を検討。</li> <li>・上記調査実施に際しては、H21年度調査で形成されたNPOなどとのネットワークを活用。</li> <li>・COP10の場における、保全活動などの発信に係る検討に活用。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・COP10後の関連行事において、伊勢三河湾流域の保全活動の取組を情報発信。</li> <li>・中部地方の生物多様性資料集を作成。</li> </ul>
	24年度	<p>伊勢湾流入河川上流部や伊勢湾岸における流域の団体と共同し、啓蒙活動を継続的に実施すると共に、保全活動の取組等に関する広報活動を実施。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・H21年度調査以来形成されてきたNPOなどとのネットワークを活用し、流域の様々な団体との連携・共同による、伊勢湾流入河川上流部や伊勢湾沿岸における清掃活動を実施。</li> <li>・COP10後の関連行事において、伊勢三河湾流域の保全活動の取組を情報発信。</li> </ul>
	総括的評価	<p><b>調査目的の達成状況とその要因</b></p> <p>調査とその後のフォローアップを通じて、伊勢湾流域内の様々な団体のネットワークを構築することができた。ネットワークが連携し、生物多様性の持続可能な利用について上流～下流(森～里～海)というつながりの中で考察するというテーマが形成され、その結果の一つとして伊勢湾流入河川上流部でのエクスカージョンと伊勢湾沿岸の清掃活動をセットにした企画が進行している。地域コミュニティにおける生物多様性保全のあり方を考えるうえで重要な「流域のつながり」をNPO、企業、地方自治体・国を巻き込んだ様々な団体で構成できたということで、調査の目的は達成されたと考えられる。</p> <p>また、課題としては、調査内容(活動団体紹介)の公表について、積極的な発信が出来ることより効果的だったと考えられる。</p> <p><b>調査手法の妥当性</b></p> <p>エリア別の調査により現状分析を実施したことで、エリア毎の実態を詳細に把握することが出来たため、手法は概ね妥当であったと考える。</p>	